東北大学大学院　国際文化研究科

GSICS
TOHOKU UNIVERSITY

GLOBE

https://www.intcul.tohoku.ac.jp

国際文化研究科　広報

No.37

Oct 2024

Contents

02 研究科長メッセージ

03 研究科西棟竣工
研究科創立30周年記念式典
優秀論文紹介

04 研究プロジェクト
内原　卓海 講師
小原　豊志 教授
目黒　志帆美 准教授
松本　明日香 講師

06 新任教員紹介
木村　可奈子 准教授
真家　崚 講師
Liu Xiaoyue 助教

07 受賞報告

08 退職教員からの言葉
藤田　恭子 教授
佐野　正人 教授

09 修了者からのメッセージ
張　蕊 さん
小山内　詩織 さん

10 科研費採択報告

12 INFORMATION
○キャリア講習会
○新刊紹介
○公開講座
○入試説明会
○入試日程

研究科長メッセージ

国際文化研究科長　江藤 裕之

国際文化研究科は、グローバル化、ボーダーレス化が進む21世紀の世界を背景に、様々な地域文化、その文化が生まれ発達する場となる社会、そして、文化の伝播と相互の理解に不可欠な言語、端的に言えば、文化・社会・言語の３つを国際的視点、学際的観点から研究し、その成果を学生の教育に還元していくことを目指しています。本研究科に所属する研究者は「地域文化研究」、「グローバル共生社会研究」、そして「言語総合研究」において独創的、創造的な研究成果をあげており、所属の学生は前期２年の課程、後期３年の課程のいずれであれ、国際的、学際的な視点から、論理的、批判的に物事を見る研究態度を身につけ、異文化への深い理解力、グローバルな問題の解決力、コミュニケーション能力を育みつつ、研究者としての基礎を培っております。

皆さまもニュース等でご存知のことと思いますが、昨年、東北大学は国際卓越研究大学の唯一の認定候補に選ばれ、今年の10月に正式に認定されました。東京大学や京都大学をはじめ、わが国の名だたる大学を差し置いての快挙です。今後、大学全体が一丸となって世界トップレベルの研究力の実現に向けて邁進することになり、国際文化研究科には研究と教育の双方において、これまで以上のパフォーマンスが要求されています。そういった中で、教職員、そして学生、修了生からなる研究科コミュニティーをあげて、研究科のプレゼンスを上げていけるような、研究・教育を推進して参りたいと思います。

東北大学では文理融合系に分類されている本研究科は、人文社会系、理工系のそれぞれの強みを活かした、まさに学際的な研究を進めております。また、他の研究科に比べて規模は小さくはありますが、3系9講座、さらに言語科学と持続可能性科学の２つの英語コースを有し、社会の多様なニーズに応えています。最近では、若手研究者の活躍が目覚ましく、世界的に評価の高い国際トップジャーナルでの論文掲載も増え、また、定評のある学術賞の受賞も増えております。これは、研究科構成員の研究の質の高さを示しており、研究科としてはより充実した研究環境を整えるためにより一層の努力をしてまいります。

平成5年（1993年）4月1日に東北大学の全学的改革の一環として、本学における最初の独立研究科として設立された国際文化研究科は昨年創設30周年を迎えました。研究科西棟の改修工事と重なったため、記念行事は今年の12月7日に開催します。研究科創立30周年の記念式典につきましては、研究科ウエブサイト、あるいはメールにてお知らせします。本研究科にご縁のある方々とともに30周年をお祝いできることを心から楽しみにしております。

研究科西棟の改修工事は終了し、今年の6月に引っ越し作業が行われました。新しい西棟は、大部分が教員研究室、講座研究室（院生室）、講座資料室となり、それに加えて国際交流室、産学連携共同研究室、産学連携実験室、地域連携室、言語科学実験室等が配置され、国際文化研究科の新たな研究ハブとなることが期待されます。

この30年で、私たちをとりまく世界には多くの変化がありました。研究科や大学だけでなく、国内外の情勢も大きく変わりました。とくに、2020年からのコロナ禍の影響で私たちの生活スタイル、というか生き方そのものにも大きな変化があったように思えます。まさに、パラダイムの変化をヴィヴィッドに経験しているところです。この変わりようをどのように見なすかは、私たちの考え方次第だと思いますが、できるだけ、よい方向、つまり、変革のチャンスだとポジティブにとらえていきたいものだと思っています。

改修工事を行っていた研究科西棟がついに竣工

このたび、東北大学国際文化研究科に所在する研究棟が5月にリニューアルしました。研究棟は西棟と東棟が連結しており、2023年度（令和5年度）より西棟が改修工事に入っておりました。改修工事中は、西棟研究室を使用する先生方、大学院生、ご訪問者にはご不便をおかけしましたが、今後ご活用いただけますと幸いです。本記事では改修の経緯、改修のポイントをご紹介します。西棟在籍の方以外も、是非、機会があればご訪問・ご使用されてみてください。

西棟は築後35年以上が経過し、2021年（令和3年）には天井裏パイプからの漏水によって、教員研究室や院生室の水漏れやカビが発生、経年に伴う建物基礎部分の陥没などが見られていました。また、国際文化研究科と東北大学の発展と共に、設備に不足が見られるようになってきていました。

そのため、第1に、湿気や換気に十分配慮した設備を導入し、さらにバリアフリーにも対応した全面的な改修を行いました。第2に、演習室と講義室、研究室と院生室が新しく生まれ変わりました。まず対面授業とネット配信を同時に行えるハイフレックス授業対応になっています。また、講義とアクティブラーニングを随時切り替えられるよう、机・椅子の配置を自由に変えることが可能になりました。言語科学実験室の近くに教室を設置することで、授業の中で実験も組み込みやすくなっています。第3に、2つの英語学位取得プログラムに対応しています。1つ目の「言語総合科学コース（IGPLS）」では国際共同研究や脳科学などの学際研究において実験を重視していることから、今般、実験設備を機能的に再整備しました。2つ目の「グローバルガバナンスと持続可能な開発プログラム（G2SD）」はSDGs達成に貢献する人材を養成しつつ、産官学連携を推進しており、西棟には打ち合わせや会議スペースをしっかり整備しました。今後の企業や海外大学・国際機関との共同研究や連携がますます期待されます。以上のように、まさに東北大学ビジョン2030に叶った新しい研究棟の誕生です。

研究科創立30周年記念式典

■開催日時：2024（令和6）年12月7日（土）13:30～16:30　■会場：MM棟6階

《プログラム》
13:30～14:00　記念式典（研究科長挨拶、来賓祝辞、研究科プロモーションビデオ披露）
14:10～15:00　特別記念講演
15:10～16:10　修了生記念トーク
16:10～16:30　ビデオレター披露

優秀論文紹介

Gong, L.,& Uehara, S. (2024). Encoding of nominal predication constructions: a typological investigation in verb-initial *languages. Linguistic Typology, 28(2)*, 291-330. https://doi.org/10.1515/lingty-2023-0035

Liu, C., Jeong, H., **Cui, H.**, Dewaele, J., Okamoto, K., Suzuki, Y., & Sugiura, M. (2024). Effects of social interactions on the neural representation of emotional words in late bilinguals. *Language, Cognition, and Neuroscience, 39(3)*, 383–399. https://doi.org/10.1080/23273798.2024.2307630

Yoshihara, M., Nakayama, M., Xue, J., & Hino, Y. (2024). Does rotation eliminate masked priming effects for Japanese kanji words? *Cognition, 246*, 105759. https://doi.org/10.1016/j.cognition.2024.105759

※太字は本研究科在校生（ポスドク研究員を含む）または既卒生、下線は教員

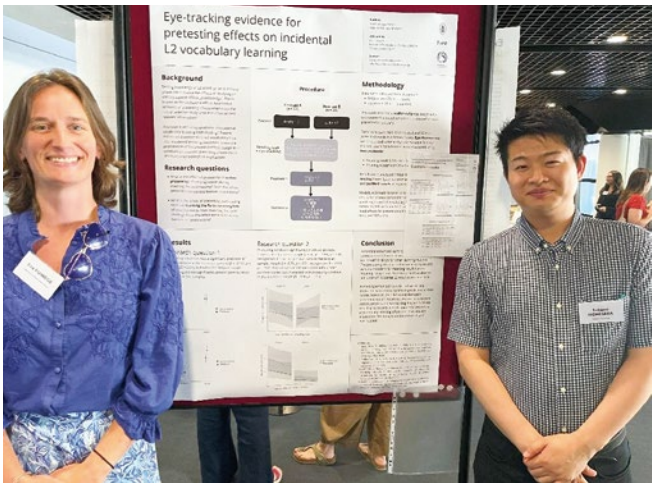
研究プロジェクト

東北大学―ルーヴェン大学国際共同研究

応用言語研究講座
講師　内原 卓海

２０２３年10月～２０２４年1月の間ベルギーのルーヴェン大学（KU Leuven）所属博士研究員エバ・プイメージ氏（Dr. Eva Puimège）を客員研究員として東北大学国際文化研究科にお招きしました。プイメージ氏は第二言語習得研究の分野で視線計測技術を用いた研究をされており世界的に活躍されている若手研究者です。約３カ月間、プイメージ氏と内原（国際文化研究科応用言語研究講座）は国際文化研究科の研究支援（研究科長裁量経費）を受けて、日本人英語学習者を対象に「偶発的語彙学習におけるテスト効果の検証」を目的とした国際共同プロジェクトを実施しました。単語帳や単語カードを使った意図的語彙学習とは異なり、偶発的語彙習得とは外国語の本などを読む中で付随的に発生する語彙学習を指します。従来の語彙研究では語彙テストを学習活動前後に用いることでその効果測定をしていましたが、近年事前語彙テストを受験する行為自体が読解活動の認知過程に影響を与えるという問題点が指摘されています（例えば、テストを受けることで、もはや偶発学習ではなくなってしまうという意見がある）。本プロジェクトでは世界初、視線計測技術を活用してテスト受験が読解中認知プロセスに与える影響を検証しました。当部局には視線計測機がなかったためプイメージ氏はベルギーから機器を日本まで持参していただくことでこのプロジェクトの実現が可能となりました。２０２４年7月には第二言語習得研究をテーマとした国際学会（European Second Language Acquisition [EuroSLA]）で研究結果の共同発表をしました。現在国際ジャーナル投稿のため共同執筆しています。また、これを機に国際文化研究科に視線計測機の設置が決まりました。今後も視線計測技術を活用したルーヴェン大学との共同研究プロジェクト推進を予定しており、国際文化研究科から更なる最先端研究の成果が発信されるますのでご期待ください。

プイメージ氏と研究補助学生の研究ミーティング時の様子



国際学会（フランス）でのポスター発表の時の様子

研究科長裁量経費研究プロジェクト「多文化・グローバル社会におけるアメリカ研究ネットワークの構築」

ヨーロッパ・アメリカ研究講座　教授　小原 豊志
多文化共生論講座　准教授　目黒 志帆美
国際政治経済論講座　講師　松本 明日香

本研究プロジェクトは、本研究科に所属し、アメリカ合衆国を研究対象とする3名の教員（小原豊志（ヨーロッパ・アメリカ研究講座）、目黒志帆美（多文化共生論講座）、松本明日香（国際政治経済論講座））をプロジェクトメンバーとして、「多文化・グローバル社会におけるアメリカ研究ネットワークの構築」という中長期的目標のもとに、本研究科におけるアメリカ研究教育体制の充実とその情報発信を試みたものです。その具体的な方策として本プロジェクトでは以下の講演会を開催しました。

第1回（2023年11月18日（土））講師：川島正樹（南山大学教授）
講演題目：「市民権運動の時代のアメリカ」の総括へ向けて
第2回（2023年12月23日（土））
講師：鈴村裕輔（名城大学外国語学部准教授）
講演題目：米国社会の縮図としての大リーグ―大リーグから考える現在の米国社会の分断と多様性
第3回（2024年3月5日（火））講師：三牧聖子（同志社大学准教授）
講演題目：アメリカとガザ危機―Z世代の視点から

第1回講演会においては、公民権運動として知られる20世紀中葉に展開した黒人の権利回復運動研究の第一人者である川島先生より、この運動の意義と限界をご自身の現地調査の経験を交えつつ語っていただきました。さらに、この運動によってもなお「人種」による分断が続き、ブラックライブズマター運動が展開している現状を踏まえ、人種問題が今後アメリカ社会にいかなる影響を及ぼすのかについても語っていただきました。

第2回講演会においては、アメリカの国民的スポーツである野球の歴史を専門とし、とくにメジャーリーグの歴史の造詣の深い鈴村先生より、トランプ大統領が始球式を行わなかった史上初の大統領であることを切り口として歴代大統領によるスポーツの政治利用の側面とトランプ政権期のアメリカ社会の分断状況を語っていただきました。これに加え、大谷翔平選手に見られるように、メジャーリーグでますます顕著になっているプレーヤーの人種的・民族的多様性の現状とその意味を語っていただきました。

第3回講演会においては、気鋭の国際政治学者としてマスコミにもしばしば登場する三牧先生より、2023年10月から始まったイスラエルによるガザ地区への軍事攻撃に対してアメリカが一貫してイスラエル支持の姿勢を示していることが国際秩序をどう変えるのかについて語っていただきました。さらに、そうしたアメリカ政府の姿勢が国内の世論にどう受け止められているのかについて、とくに1990年代半ばから2010年代序盤に生まれたZ世代に焦点を当てて語っていただきました。

以上のように、今回の一連の講演は黒人史、スポーツ史、および外交史の切り口から、こんにちのアメリカ合衆国が直面する課題を取り上げたものです。いずれの講演においても豊富な資料のもとに明快な語り口でお話が進められ、学内外からの参加者の興味関心に応える内容でした。実際、参加者からはコロナ禍後にこうした講演会活動が再開されたことを喜ぶ声が多く聞かれました。また、各先生の現地調査の体験談が数多く紹介されたことから、座学では知りえない生の情報に接することができたと評価する声も聞かれました。

本年はアメリカ大統領選挙年にあたり、その結果についてはこれまでになく世界の注目を集めています。今後も機会があればアメリカ合衆国をより深く知るための機会を提供したいと思いますので、その際にはふるってご参加ください。

新任教員紹介

アジア・アフリカ研究講座

准教授

木村　可奈子

2024年4月にアジア・アフリカ研究講座に着任いたしました、木村可奈子と申します。出身は仙台で、学部は東北大学文学部、修士課程は本研究科のイスラム圏研究講座で学びました。博士課程は京都大学に編入学しましたが、それがまさに2011年のことでした。3月11日に東日本大震災が起こり、何もかも大混乱の中京都に向かいました。修了式・学位記授与式も中止となり、郵送で学位記を受け取ったことを印象深く覚えています。

そこから13年、間に韓国・台湾への留学を挟みつつ基本的には関西で生活していたため、仙台には年末年始に帰省できればよい方でした。震災後の復興とともに変化していく仙台を目の当たりにするたびに、離れた年月を感じ少しさびしく感じていましたが、思いがけずこの度本研究科に着任することになり、懐かしい方々との旧交を温めながら新たな仙台での生活を送っています。

専門は前近代の東アジアの国際関係史で、明清中国・朝鮮・日本・琉球・シャムといった国々の国際関係を研究しています。ちょうど着任直前に今までの研究を著書として出版するという一区切りがあり、このタイミングで自身の研究の原点である東北大学に戻ってきたことは感慨深いです。原点に立ち返り、研究を深めていきたいと思います。また、修士時代のイスラム圏研究講座では今の専門とは全く違う分野を研究していましたが、その経験を現在のアジア・アフリカ研究講座での教育活動に役立てられればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

言語科学研究講座

講師

真家　崚

2024年4月より言語総合系 言語科学研究講座に着任しました、真家崚（まいえ りょう）と申します。専門は外国語習得の認知心理学で、ヒトが外国語を学習する際の認知メカニズムを解明し、その知見を教育に応用することを主の研究分野としています。

私は茨城県小美玉市の出身で、学部2年生の半ばまで千葉県の神田外語大学で言語学と第二言語習得を学び、残りの1年間をアメリカのダートマス大学にて認知心理学を学びました。母が私を幼少期から英会話教室に通わせてくれたおかげか、早くから英語に興味を持つようになり、その影響で学部初年度には高校の英語教員になろうと思っていました。2年次に海外の有名な第二言語習得の研究者が日本で講演を行い、外国語習得にも科学的な側面があることに感銘を受け、この道に進むことを決めました。留学中に、外国語をどう練習すれば効果的な学習につながるのか、「練習」「スキル習得」「自動化」という視点から研究しようと思い、大学院に進みました。出身はメリーランド大学（修士課程）、ミシガン州立大学（博士課程）です。

言語のようなスキルの上達には意識的な練習が不可欠ですが、ではどのような練習が効果的なのでしょうか？言語には文法、語彙、発音、語用など様々な側面がありますが、同じ練習方法が全ての側面に同様に効果的なのでしょうか？例えば、スピーキングには言語使用の正確さ、流暢さ、複雑さがありますが、それぞれの側面を向上させるためにはどのような練習が必要なのでしょうか？これらの問いに対して、実験室や実際の教室での実験を通して答えを見つける研究をしています。東北大学では、脳科学や心理言語学のアプローチなども駆使し、日本、さらには世界の外国語教育に貢献することを目指しています。

国際政治経済論講座
助教
Liu Xiaoyue

2024年4月から国際文化研究科 国際政治経済論講座に助教として着任しましたLiu Xiaoyue（りゅう ぎょうげつ）と申します。この場をお借りして、ご挨拶させて頂きます。私は中国出身で、2016年に本研究科に研究生として入学してから博士前期2年、後期3年の課程を経て、2022年3月に博士（学術）の学位を取得しました。その後、講座の大型研究プロジェクトに参画しながら本研究科の専門研究員·学術研究員として勤務しましたので本研究科には8年間在籍していました。私の研究テーマは、持続可能な資源循環です。このテーマに興味を持ったのは、学部時代に日本に交換留学した際に目にした、日本のごみ分別のルールでした。日本のごみ分別は非常に細かく、中国のルールとは全く異なり、大変興味深いものでした。そこで、「なぜ日本ではここまで細かくごみを分別するのか？」と疑問を持ち、その背景や理由、政策の仕組みを調べ始めました。色々な調査を進めるうちに、私は「ごみ」が単なる廃棄物ではなく、資源として新たに生まれ変わる可能性を秘めていることを分かりました。そのためには、適切なごみ分別や適正な処理、そしてリサイクルが重要であり、これらのプロセスがどのように持続可能な社会の実現に貢献するのかを解明する必要があります。私は、このような問題意識から持続可能な資源循環とは何かを体系的に研究し始めることになりました。具体的には、ごみの分別がどのように作られたのか、その効果と限界を分析するだけでなく、ごみのリサイクル率を向上させるために必要な社会的·技術的な条件を探る研究に取り組んでいます。また、地域社会が国や地域の資源循環政策の取り組みをどのように受け入れ、実践しているかについても注目し、社会·経済·環境·文化的な要因や住民の環境意識についても考察·分析を行っています。今後は、日本国内のみならず、世界中で広がりを見せるさまざまな循環経済システム·資源循環モデルを比較·分析し、それぞれの社会や地域に適した解決策を探ることで、地球規模課題である脱炭素社会及び循環経済社会を基盤とする持続可能な社会形成に貢献したいと考えています。国際文化研究科の皆さんと一緒に、分野横断的な知見を共有し合い、様々な交流ができることを楽しみにしています。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

受賞報告

○アジア・アフリカ研究講座博士後期課程の張蕊さんの研究が、第10回澤柳記念DEI奨励賞を受賞しました

○アジア・アフリカ研究講座博士後期課程の張蕊さんが令和5年度東北大学藤野先生記念奨励賞を受賞しました

○環境科学研究科「第5回環境科学討論会」にて国際政治経済論講座DC3小山内詩織さんが「Best Poster Award」を受賞しました

○アジア・アフリカ研究講座のカ・キハンさんが日中関係学会から第12回宮本賞最優秀論文賞を、李孰是而さんが優秀論文賞を受賞しました

○アジア・アフリカ研究講座の勝山教授の作品が文学雑誌『文芸思潮』で銀華文学賞を受賞しました

○アジア・アフリカ研究講座博士後期課程王霄漢さんの研究論文が、第43回昭和池田賞（特別努力賞）を受賞しました

○北野生涯教育振興会の懸賞論文でアジア・アフリカ研究講座博士後期課程の鄧朝陽さんが第２席に入選しました

○アジア・アフリカ研究講座の勝山教授が第19回文芸思潮エッセイ賞を受賞しました

○アジア・アフリカ研究講座博士前期課程謝捷さんが勤労青少年躍進会理事長賞を受賞しました

○言語科学研究講座のジスク・マシュー・ヨセフ准教授が漢検漢字文化研究奨励賞「最優秀賞」を受賞しました

退職教員からの言葉

多文化共生論講座
教授
藤田　恭子

東北大学での日々

私は1992年に東北大学教養部に赴任した。言語文化部を経て、2001年に国際文化研究科に配置換となり、32年間を東北大学で過ごした。この間、比較文化論講座や多文化共生論講座に在籍したが、修了生たちは、大学や高校・中学などで教鞭をとっていたり、企業や地方自治体での職務にあたっていたり、それぞれの道を歩んでいる。大学院教員は学生の人生の大事な一時期を引き受けているが、最終講義で多くの修了生と再会し、彼らの現在を確認できたことで、責任をおおよそ果たせたのではないか、と安堵の気持になった。

教育の傍ら、ルーマニア・ドイツ語文学の研究にも注力した。「ドイツ文学」というと、現在の国境を念頭に理解されることが多いが、ヨーロッパは国境変更を繰り返しており、現在はルーマニアやウクライナ領の地域にも、ドイツ系やユダヤ系のドイツ語話者が数多く住んでいた。私はこれらの地域のドイツ語文学を研究し、「ドイツ文学」という研究分野の再構築を試みている。成果の一つは、2014年刊行の単著『「周縁」のドイツ語文学―ルーマニア領ブコヴィナのユダヤ系ドイツ語詩人たち―』で、この書は第13回日本独文学会学会賞を受賞した。そしてこの分野の研究基盤である資料収集を大学が支援してくれた。

1989年のチャウシェスク体制崩壊後、ルーマニアのドイツ系住民は雪崩をうって出国し、混乱の中で資史料が散逸する傾向にあった。2005年、ルーマニア出身のドイツ語作家から、蔵書家の貴重な遺品を一括して買い取ることはできないか、との問い合わせがあった。複数の研究助成があったので、費用の一部を大学から借用できれば、買取は可能だった。そのとき、当時の研究科事務長は、「貴重な資料を散逸させないことも国立大学の使命です」と言って、買取を可能にしてくれた。私はその時、国立大学にいることをとても誇らしく幸せに感じた。忘れられない思い出である。

国際日本研究講座
（メディア・ジェンダー系）
教授
佐野　正人

未来型の学問研究を目指して

今年3月に20年務めた研究科を定年で退職しました。初めはアジア文化論講座に所属し、その後講座再編で国際日本研究講座に移りました。総じてよい同僚と優秀な学生たちに恵まれ、充実した教員生活を送れたと思っています。

20年前に国際文化研究科に赴任することに決まって、大変嬉しい思いをしたことを思い出します。ホームページでは国際文化研究科の理念について、学際的で総合的な学問のあり方を目指すと書かれており、また文理融合を掲げていました。私は大学院では国文学を専攻したのですが、その後韓国で日本語・日本文化を教えたことで、日韓の比較文学に深い関心を持つようになり、東アジア的な視野から日本文学や日本文化を問い直していきたいと考えていたためです。そのような既存のディシプリンからははみ出すような研究・学問のあり方を国際文化研究科では追求できると大変嬉しく思った次第です。

その後、個人的には東アジアの大衆文化（映画、ドラマ、ポップスなど）に対象を広げて、比較文化的な視野から問い直すような研究を続けてきました。中国、韓国などからの留学生が多かったという事情もありますが、そこには学生たちとの対話から多くの刺激とインスピレーションをもらったことを強調しておきたいと思います。

国際文化研究科は留学生が多いことや、学際的な学問研究に開かれていること、人文・社会・自然科学の多分野のスタッフがいる点、など多くの点で未来形の学問研究に開かれている研究科だと考えています。21世紀の学問研究は、地球温暖化などの環境問題や少子高齢化などの社会問題、メディア・ジェンダーの急速な変化などの様々な新しいグローバル課題に対応していかなければなりません。まだ形をなしていないような新たな研究の分野にその意味で挑戦していかなければならない課題を負っていると言えます。その意味で、柔軟で既存のディシプリンに捉われない国際文化研究科こそが、21世紀の未来形の学問を先導していく可能性を有しているはずです。ぜひ新たなメンバーの皆さんがそのような未来形の課題に挑戦していくことを望んでいます。

修了者からのメッセージ

アジア・アフリカ研究講座
2024年3月
博士課程後期修了
張　蕊

代えがたい人生の財産

私は2015年に学部研究生として東北大学国際文化研究科のアジア・アフリカ研究講座での研究生活を始めました。東北大学国際文化研究科での9年間の留学生活を通して、学問の探求にとどまらず、私の人生そのものが豊かになりました。国際文化研究科で学び、成長できたのは、素晴らしい教授陣と仲間たち、そして日々の努力の賜物であり、心から感謝しています。

修士課程や博士課程での研究は決して容易ではありませんでした。数多くの挑戦や困難がありましたが、それらを乗り越える過程で私は成長し、知識と経験を積むことができました。研究テーマに対する情熱を持ち続け、困難に立ち向かうことで、学問の深さや研究の面白さを実感しました。そして、自分の研究成果を発表する瞬間や、新たな研究の視点を得たときの喜びは、言葉では表しきれないほどの感動を伴いました。

私の研究テーマは「周作人の女性思想に関する研究」であり、指導教授の勝山稔先生をはじめとする先生方のご指導のもと、研究の楽しさを実感するとともに、様々な学会に参加することで視野を広げることができました。先生方のご指導と励まし、そして仲間たちの応援のおかげで、自分の研究分野でいくつかの成果を上げ、総長賞、藤野先生記念奨励賞、第十回澤柳記念DEI奨励賞などの賞もいただくことができました。

国際文化研究科での学びは、異なる文化や視点を理解し、グローバルな視野を広げる貴重な機会を提供してくれました。異文化交流活動や学際的研究活動などの経験で、私は世界の多様性を尊重し、相互理解の重要性を実感することができました。また、この学びの道を歩む中で、多くの素晴らしい人々と出会いました。研究仲間たちとのディスカッションや共同研究は、私の知的好奇心を刺激し、学問への熱意をさらに深めるものでした。

修了生としての新たな一歩を踏み出す今、私はこれまでの学びを基に、これからの挑戦を続けていくつもりです。国際文化研究科で得た知識や経験は、私にとって何ものにも代えがたい貴重な財産です。

国際政治経済論講座
2024年3月
博士課程後期修了
小山内　詩織

みんなに支えられた研究生活

はじめまして。2024年3月に国際文化研究科を修了、博士号を取得し現在は本研究科の国際政治経済論講座で学術研究員をしております、小山内詩織と申します。

はじめに私の大学院生活の5年間を振り返ってみたいと思います。2019年4月に修士1年生となり、とにかく必死に自身の研究の基盤固めに取り組みました。また、修士1年目の夏からは「災害科学・安全学国際共同大学院プログラム」の第一期生となり、同年12月にはハーバード大学ライシャワー日本研究所にて、東日本大震災の経験から得た学びを国際的に共有する機会を得ました。その1か月後にコロナ禍が始まり、2022年度の秋学期までは授業がオンラインベースになり、研究へのモチベーションを維持するのが難しくなりました。しかし、指導教員の先生方の支えもあって、心が折れることなくコロナ禍を乗り切ることができました。そして、博士課程3年目の2023年7月には念願の韓国での実地調査を行うことができ、実り多い実地調査で良いデータを収集することができたおかげで、納得できる博士論文を執筆することができました。私の研究は指導教員の先生方をはじめ、国際共同研究に携わってくださった先生方やスタッフの皆さん、事例研究に協力してくださった高等学校の生徒の皆さんや先生方、研究生活を支えてくださった事務の皆さんのお力添えのおかげで遂行することができました。先輩や後輩、友人や家族も精神的な支えでした。そして令和6年学位記授与式にて修了生等総代答辞を務め、この感謝の気持ちを伝えられたことが、大学院生活で最も嬉しい思い出となりました。

大学院生活は楽しいことも沢山ありますが、辛いことや苦しいこと、コロナ禍のようにどうしようもない状況に追いやられる機会も多いと思います。そんな時は一人で悩みを抱え込まずに、周囲の人に助けを求めてください。そして、諦めずに頑張り続けた先で、助けてくれた人全員に「ありがとう」を伝えられたらこれ以上のことはないと私は思います。国際文化研究科で頑張っている大学院生の皆さんをこれからも応援しております。

2024年度科学研究費補助金採択一覧

氏　名	課題番号名	研究種目	新・継	研究課題名	備　考
池田　亮	23K20585	基盤研究(B)	継	「航行の自由」と英米覇権ー開かれた国際海洋秩序とそれへの挑戦	
佐藤　雪野	23K21803	基盤研究(B)	継	EUにおける移民・難民統合政策の課題と展望―旧社会主義圏を中心に	
Jeong Hyeonjeong	23K21946	基盤研究(B)	継	他者との相互作用を通した第二言語習得の神経基盤ー口頭・筆記の共通性と特殊性ー	
大河原　知樹	23K25445	基盤研究(B)	継	中東における協働・共有の法制と実態：組合と財産共有	
勝間田　弘	24K00223	基盤研究(B)	新	領土紛争の比較研究	
内原　卓海	24K00080	基盤研究(B)	新	偶発的語彙習得の神経基盤の解明：脳イメージングによる文脈類推学習効果の検証	
中本　武志	17K02670	基盤研究(C)	継	日中バイリンガル幼児のコード・スイッチングに見られる普遍的制約	
黒田　卓	19K01012	基盤研究(C)	継	イラン系ムスリム知識人がみた近代世界	名誉教授
渡邊　竜太	19K01049	基盤研究(C)	継	チェコ／ドイツ国境地域における20世紀地域社会史	GSICSフェロー
勝間田　弘	19K01519	基盤研究(C)	継	ASEAN外交と国際関係の理論	
坂巻　康司	20K00489	基盤研究(C)	継	近現代フランス演劇における＜祝祭＞概念の総括的検討	
朱　琳	20K01468	基盤研究(C)	継	清末知識人と明治日本の政治学――東アジアにおける連鎖と比較の政治思想史	
市川　真理子	21K00338	基盤研究(C)	継	近代初期イギリス演劇における基本的舞台道具の使用方法に関する総合的研究	名誉教授
鈴木　道男	21K00451	基盤研究(C)	継	「国民詩人」の共有とディアスポラーメディアによる「民族」形成機能と文学	名誉教授
江藤　裕之	21K00753	基盤研究(C)	継	香港、タイの大学における課外英語学習支援の現状、及び我が国の大学英語教育への応用	
山下　博司	22K00068	基盤研究(C)	継	マレー半島南半の複合社会における宗教の多元的共存と包摂的共生秩序の研究	名誉教授
勝山　稔	22K00287	基盤研究(C)	継	中国通俗小説受容の完全な体系化に向けた研究―民間翻訳の本格導入による多面的解析	
藤田　恭子	22K00460	基盤研究(C)	継	ディアスポラとしてのルーマニア・ドイツ語話者と文学ー世界への拡散・孤立化・連帯―	名誉教授
大窪　和明	22K04361	基盤研究(C)	継	データ駆動型ロバスト最適化による次世代の復興土地利用計画に関する研究	
妙木　忍	23K11671	基盤研究(C)	継	女性のライフコース選択を支えた地域社会の実証的研究―日本の芸者文化を事例として―	
井上　浩一	23K00452	基盤研究(C)	継	近現代『西遊記』翻訳史の構築	GSICSフェロー
佐藤　恒徳	23K00086	基盤研究(C)	継	クリスティアン・ヴォルフ『第一哲学即ち存在論』の存在論の研究	GSICSフェロー
鈴木　美津子	23K00349	基盤研究(C)	継	ロマン主義時代の文学作品に見られるアメリカ表象	名誉教授

2024年10月6日現在

氏　名	課題番号名	研究種目	新・継	研究課題名	備　考
岡田　毅	23K00765	基盤研究(C)	継	翻訳支援ツールを活用した学術英語ライティング能力の段階別育成手法の研究と開発	名誉教授
高橋　大厚	24K03833	基盤研究(C)	新	節の省略の比較統語論研究	
小原　豊志	24K04298	基盤研究(C)	新	デモクラシーの「飼いならし」―初期アメリカにおける反ポピュリズムの言説構築と実践	
佐藤　透	24K03352	基盤研究(C)	新	心の一人称的特性と心身問題―間主観的構成論から見た心身の相関―	
中山　真里子	24K06615	基盤研究(C)	新	中日バイリンガル(Logographic Bilinguals)の心的辞書における音韻表象の解明	
朱　琳	24K04281	基盤研究(C)	新	清末民国初期の日本人居留民社会に関する総合的研究：北京・天津を中心として	
クラウタウ オリオン	24K03414	基盤研究(C)	新	憲法作者としての聖徳太子：その表象の思想史的研究	
ジスク. マシュー	24K03860	基盤研究(C)	新	A Comparative Study of the Influence of Glossing on the Historical Development of Japanese and the Languages of Europe	
Ｊｅｏｎｇ Ｈｙｅｏｎｊｅｏｎｇ	22K18464	挑戦的研究（萌芽）	継	外国語による感情処理神経メカニズムの解明ー教室外の言語経験とfMRIの融合ー	
妙木　忍	17K17596	若手研究(B)	継	医学的まなざしと女性の身体―解剖学と展示の政治性をめぐる国際比較研究―	
中山　真里子	19K14468	若手研究	継	日英バイリンガルのL2表記表象の解明	
メスロピャン. メリネ	21K13085	若手研究	継	Armenian Refugees in the Early 20th c. Japan: Mixed Methods Analysis	ＧＳＩＣＳフェロー
佐藤　正弘	21K13276	若手研究	継	COVID-19の感染リスク等に関する社会的学習の実証研究	
繁田　真爾	22K12987	若手研究	継	「悪」の統治実践と人間観をめぐる近現代日本の思想史的研究―監獄教誨・死刑・宗教―	ＧＳＩＣＳフェロー
吉原　将大	22K13867	若手研究	継	視覚刺激の空間的変化が単語認知に及ぼす影響の解明	特別研究員
真家　崚	24K16124	若手研究	新	認知神経科学アプローチからの外国語習得におけるスキル習得のメカニズムの解明	
山下　博司	22KK0001	国際共同研究加速基金（国際共同研究(B)）	継	アジア多文化社会におけるエスニシティと宗教間宥和ー日本の移民問題等も視野に	名誉教授
和田　萌	22K20107	研究活動スタート支援	継	現代フランスの対外政策における宗教事象の位置付けーライシテ外交を中心にー	
吉原　将大	22KJ0211	特別研究員奨励費	継	第二言語としての日本語における語彙獲得プロセスの解明：語彙競合による検証	特別研究員
韓　相允	23KJ0142	特別研究員奨励費	継	戦後日本における密教とオカルトの諸相――グローバル宗教史の観点から	DC2
NGUYEN THI THU HUYEN	23KJ0146	特別研究員奨励費	継	ベトナム語による漢文読解の実証的研究	DC2
小室　竜也	23KJ0263	特別研究員奨励費	継	日本人英語学習者の発表語彙知識測定	特別研究員
市川　真理子	24HP5036	研究成果公開促進費（学術図書）	新	シェイクスピアのオリジナル・ステイジング　楽屋正面壁の構造と使用方法	名誉教授

INFORMATION

キャリア講習会

国際文化研究科では、毎年、様々な分野で活躍する修了生にご自身の経験談をお話しいただいております。昨年度は東北大学情報科学研究科の特任助教に就任した半田幸子さん（比較文化論講座博士後期課程修了）を講師としてお招きし、「大学教員という選択肢――院生生活、研究、教育についての経験談」というタイトルで、令和5年11月18日に講習会を開催しました。半田さんは本研究科を修了後、ノースアジア大学法学部講師を経て、令和5年4月から現職に就かれています。講演では、東京外国語大学の学部生時代を含め、本研究科での研究生活、チェコの日系企業での社会人生活、また研究を始めたきっかけなど、様々な選択肢の中で研究者として現在の研究に辿り着いたご自身の経験や悩みを交えながら、今までの道のりを親しみやすく語ってくださいました。進路に悩んでいる大学院生や研究に行き詰まっている院生にとって、とても心強く、感動的な講演だったと思います。1時間の中で簡潔にまとめられたお話でしたが、半田さんの誠実で丁寧な仕事ぶりや研究への情熱が伝わりました。現在、半田さんは『戦間期チェコのモード記者 ミレナ・イェセンスカーの仕事―〈個〉が衣装をつくる』（春風社）などの出版を通じて旺盛な研究活動を行っています。半田さんの貴重な講演に心より感謝申し上げます。非常に有意義なキャリア講習会になったように感じます。(鄭 嫣婷)

新刊紹介『隠された聖徳太子』

本研究科日本宗教・思想史研究講座のオリオン・クラウタウ准教授が、新書『隠された聖徳太子――近現代日本の偽史とオカルト文化』（筑摩書房、2024年）を刊行しました。本書は、十七条憲法の作成や冠位十二階の制定で知られる偉人・聖徳太子をひとつの表象として捉え、彼にまつわる近代以降の多くの「異説」がどのような背景で成立したのかを丹念に検討したものです。19世紀末の歴史学者の久米邦武から100年後の作家の五島勉まで、聖徳太子の「謎」に迫ろうとした人々の思想をクラウタウ氏が描いています。

公開講座

2023年11月11日に実施された公開講座では、「多文化社会の葛藤と克服の試み―現代ヨーロッパにおける他者との接触― 」というテーマを掲げ、現在、西欧諸国で増加している移民への対応といった課題について議論しました。まず、多文化共生論講座の藤田恭子先生が、「多文化社会ドイツの葛藤 ―移民受け入れを視点に―」というテーマで、近年の選挙を事例として、ドイツ社会の状況と対応を解説されました。続いて、国際政治経済論講座の和田萌先生から、「『不安』から紐解くフランス社会」というテーマで、フランスにおける移民問題を特に宗教問題との関連で解説がありました。同じく移民問題と言っても、両国には異なる歴史と思想があり、それらを背景に異なる対応が見られますが、同様の問題に将来的には現在以上に重大な規模で直面するはずの日本も同様にこれらの点を考慮すべきだと考えられます。オンライン開催でしたがフロアから活発な質疑応答があり、終了予定時刻を超えて議論が続いたことからも、この問題への関心の高さが窺えます。（池田亮）

入試説明会

2024年6月7日18時から、国際文化研究科オンライン入試説明会が開催されました。申込者は41名で、実際に参加したのは32名でした。例年、留学生の参加が多い説明会で、今年も同様の傾向がありましたが、日本人志願者も見られました。昨年度より参加者は若干少ないのですが、昨年度以降、依然として多い傾向が続いています。当日、入試実施委員長がスライドを用いながら、東北大学と研究科の紹介をした後、今年度入試の概要を説明しました。それに続き、各講座の学生が自分の講座の研究内容や指導の様子を紹介しましたが、各講座で質が高くきめ細かな指導が行われていることを物語るものでした。その後参加者からは、具体的な試験勉強の方法や在籍学生の研究テーマなど、多くの質問が寄せられ、特に講座紹介については大きな反響がありました。いずれも国際文化研究科への関心の高さを表していたといえます。最後に、説明会に参加された方々と、充実したスライドを含め全ての準備をしてくださった教務係の方々にお礼申し上げます。（池田亮）

入学を希望される皆様へ

春季入学試験は
令和7（2025）年2月13日（木）、14日（金）に行われます。

本研究科は、柔軟な思考力と広い視野および一定の語学力を有して、国際舞台で活躍できる創造的研究者または高度専門職業人になろうという明確な目的意識を持った学生を求めています。
なお、上記の入学試験の詳細については、本研究科ホームページをご覧ください。

お問い合わせは、本研究科教務係において受け付けています。

連絡先
東北大学国際文化研究科 教務係
TEL: 022-795-7556 / FAX: 022-795-7583
E-mail:int-kkdk@grp.tohoku.ac.jp

東北大学大学院 国際文化研究科 GLOBE No.37
○東北大学大学院 国際文化研究科 広報 No.37／令和6年10月
○編集／東北大学大学院 国際文化研究科 広報・公開講座委員会
〒980-8576 仙台市青葉区川内41 TEL:022-795-7541